越後華報寺中世墓址群の調査

——中世禅僧墓制の考古学的研究（I）——

中川成夫
岡本勇

一、調査の動機と経過
二、華報寺とその墓址群
三、素話和尚在銘蔵骨器出土地
四、中世禅僧の墓制
五、結語

一、調査の動機と経過

新潟県北蒲原郡笹神村出湯にある曹洞宗華報寺は、寺伝によれば弘法大師の開基といい、中世、後に南禅寺開山となった無関普門（大明国師）の入寺により禅宗となった寺である。数次の火災によって、伽藍の多くは失われ、また文書記録の類も伝わっていない。現在は本堂に安置される愛婆尊の信仰と、寺内より湧出する温泉での湯治とによって、寺院としてより、農閑期の憩の場として季節的に賑わっており、旧地域の大半は一種の門前町的景観を呈している。

近世以降、旧寺域内より石仏・五輪塔・陶器類が出土し、一部中世に遡る優品は指定保存にされたが、これらの多くは売買の対象となり散逸した。殊に戦後は昭和三十年頃より西方の蓮台野と呼ばれる一帯が、農地解放によって開墾された結果、多くの石仏・五輪塔・蔵骨器などが出土したが、これらの大半は破壊され、またあるものは好事家の手によって運び去られた。

この地方の郷土史研究家である、水原町の浄土真宗無為信寺の武田現晋師は、この現状を憂い、しばしば現地を訪ずれ、記録や、出土遺物の保存に努力し、また遺跡保存の啓蒙を行ってこられた。武田師の研究のよき理解者である、水原町公民館長

伝高阿廟址出土品（川上家蔵）
1・2. 和鏡（1/2）　3. 聖観音立像（1/2）　4. 青銅製蔵骨器（約1/2）
5. 陶鉢（1/3）　6. 陶甕（1/4）

家田三郎博士もこの現状を黙視するにしのびず、水原町当局、笹神村当局に呼びかけ、旧寺域の現状調査、保存の運動を起され、県教育委員会にも、しばしば調査方を申し入れられた。

昭和三十二年八月二十九・三十の両日、筆者の一人、中川は、新潟県教育委員会の委嘱によつて、武田師の東道で現地を踏査し、その結果に基いて、著しい破壊の状況、越後中世史に於ける華報寺の位置、或は、既出土遺物の価値の点などから、可及的速かに壊滅以前に現状の測量、出土品の記録をすべきである旨の意見を県教委へ答申した。これと相前後して、東大教授藤島亥治郎博士、文化財保護委員会三宅敏之技官等の視察もあつた。

やがて同委員会からの勧奨と地元町村の保存への動きと相俟つて、新潟県教育委員会は、昭和三十三年度県文化財調査事業として、水原町・笹神村・北方文化博物館との共催によつて、華報寺とその周辺遺跡、及び出土遺物の実測・記録を行うこととし、中川にその調査担当を委嘱された。

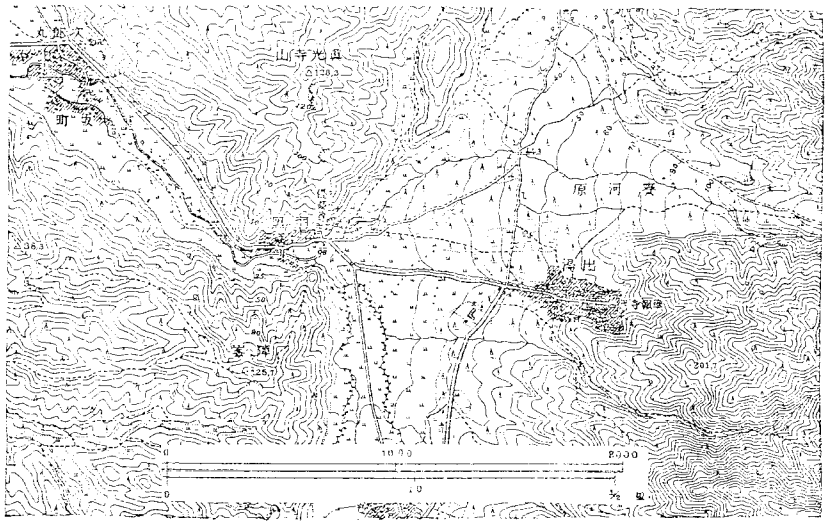
中川は本学嘱託岡本勇と共にこの調査を行うこととし、県教委文化財主任宮栄二、同主事伊藤正一氏等と共に、昭和三十三年八月四日～十日の間にこれを実施した。この調査には、上記四名の他、東京大学助手倉田喜郎、国学院大学嘱託小出義治、同大学院学生寺村光晴君等の協力を得、地元側より、前記の家田三郎博士、武田現智、樺沢忠彦、菊地耕人、荒木文雄、川上貞次の諸氏の援助もあつた。これらの方々、並びに新潟県教委、水原町、笹神村当局、北方文化博物館の熱意と、物心両面の援助とによつて、本調査が行われたことを銘記し、深く謝意を表するものである。

調査は先づ華報寺旧寺域、墓址群を含む地域の一千分之一の現状地形図を作る作業より始め、別班は既出土の石塔・石仏蔵骨器などの実測、所在、員数を確認する作業を行つた。次いで周辺地域に於ける類似の遺跡・遺物の記録、遡つて石器時代関係の遺跡・遺物の記録、及び社寺に蔵されている文書類の調査を行うた。更に他の一班は笹神村清見寺にある須恵器窯址の発掘調査を実施し、この窯址がほぼ平安時代中期頃のものであることを確認した。

この調査中、出湯の旧家川上家当主の尊父貞次氏は、同家所有山林内に、旧普賢堂跡と呼ばれ、高阿弥陀仏の墓址と推定される一群があり、ここから慶治三十八年、かまたま採石中に、徳治二年在銘の青銅製蔵骨器が出土したが、この機会にその地点を清掃してみてはどうかとの好意ある申出があつた。我々には予定外のことではあつたが、学問上も極めて意義あることであるので、その御好意に従つてこれを実施し、後述する遺構を顕出した。

この調査についての本報告書は、他の文献・民俗などの部門と併せ、昭和三十五年度新潟県文化財年報として公刊されることになつている。従つて、ここではその概略と、特に清掃した在銘蔵骨器出土遺構についてのべ、併せて中世神僧の墓制について考察することとする。

本稿を成すに当り、貴重な資料を貸与され、また種々御教示



第1図　出湯周辺地形図

を賜わった、群馬大学尾崎喜左雄教授、東京大学助教授太田博太郎博士、東京大学玉村竹二助教授、京都国立博物館景山春樹技官、本学黄逵人講師の諸先輩、駒沢大学助手奥貫隆哉君、卒業生金岩道子君、及び共同調査者宮栄二、伊藤正一の両氏に厚く謝意を捧げるものである。

二、華報寺とその墓址群

新潟県北蒲原郡笹神村出湯にある華報寺は、羽越線水原駅の東方約八キロ、海抜九一二・五メートルの五頭山を背後に負う山裾にある曹洞宗の寺院である。現在は本堂、庫裡、その他二三の堂宇のみを残す小寺院であるが、中世にはかなり栄えた寺院であったことが、後述する出土遺物・遺構・文献上から知られる。この寺に関する記録は寺自身には火災で失われてなく、また寺についての研究論文としては、伝説、出土遺物などを集成した、二瓶武爾氏「五頭山華報寺出湯温泉沿革誌」（昭和十六年）武田現瞬師「出湯の遺跡に就て」（昭和三十二年）以外には殆ど見当らない。

幕末に水原町の小田島充武の手に成った「越後野志」巻十、仏寺、蒲原郡の条に、

華報寺、白川荘出湯村ニ在、大同四年己丑三月空海師草創建立、五頭山福性院海満寺ト名ヅク、寺領五百七拾八石九斗三升、文明中曹洞宗トナリ、耕雲寺六世大庵和尚ヲ開基トシ、華報寺ト改メ名ヅク、末寺二十余寺アリ、昔年火災ニテ寺録ノ証書ヲ焼、以後寺領ヲ失ヒ、今ハ寺後ノ一山ヲ領ス、周辺一里余、杉松諸木多シ、寺中温泉アリ、又薬師

堂、慈王殿、白山神祠アリ、安永中、寺後山中ニ三十三観音堂ヲ建、寺内ニ水原城主ノ墳墓二石塔アリ、星霜ヲ経ルニト久シテ碑文湮滅シテ不分明

と見えている。

白河荘は一東福寺文書」に、元久元年四月二十三日に九条家実が、白河庄等の領地を道家に譲ったことが見え、また、同文書に、

一、家地、文書、庄園事

う。ここに四十歳まであり、やがて入宋し、帰国後もまた一時越後に退住していた。従つて華報寺は法系の上からも格式ある寺院であつたことが理解される。

既述のように白河荘は九条家の荘園であり、東福寺の開祖一条実経は九条道家の子で、白河荘を譲られた妃君とは兄妹に当る。従つて、華報寺も当初九条家と何等かの縁故をもち、普門の入座もその宗教的関係による面があつたものと推察される。

さて、中世に於ける華報寺に関する文献は、右の普門に関することの他、南北朝時代に安居院の手に成つた「神道集」に、僧良観の名が華報寺長老として見える以外に見当らない。鎌倉幕府の地頭として白河庄に補されたのは、御家人大見氏であつた。大見氏は元来伊豆の豪族で桓武平氏を称した。「吾妻鏡」によれば、治承四年八月、頼朝挙兵の際に参じた武士の中に、大見平二家秀の名が見え、爾後、その名は常に多くの関東御家人の歴名中に記されている名門である。大見氏と越後との関係は、現存史料では、「越後文書」所収の家秀の子実景の譲状に

譲与

越後国蒲原郡白河庄之内

水原条、舟江条

此内、小舟江村之内田地七百苅、屋敷五間、寺社、為庶子分除之者也

右代々手継状、系図、証文等相副、息式部大夫行定に譲与処実也、並不可有妨者也、仍如件

寛喜元年記 八月十一日　肥後寺　実景（花押）

とあるを最古とする。恐らく家秀の頃に、この地を幕府より与えられたものであろう。

実景の子行定の譲状に、

譲与

越後国白河庄猿田村并温川郷内次郎丸

地頭職事

右所々譲渡女子字真琢事実也、但、武町者可為給田、其余者任先例可令弁済本家御年貢也、山野事 東西限筏寄加茂岡山路之西限上野堂東出南限鍛沢の通花 若至細見宗家所帯之譲状、仍状如件

弘安六年四月五日　平朝臣（花押）

とあり、現水原郷の大半を領有していたことが知られると共に、寺域周囲を殺生禁断の地としていることは、大見氏も亦、この寺を支えた有力者の一人であつたと推察される。(3)「越後野志」巻十に、宝暦九年九月、華報寺薬師堂の傍より、長八寸の銅製経筒が出土し、その銘文は、

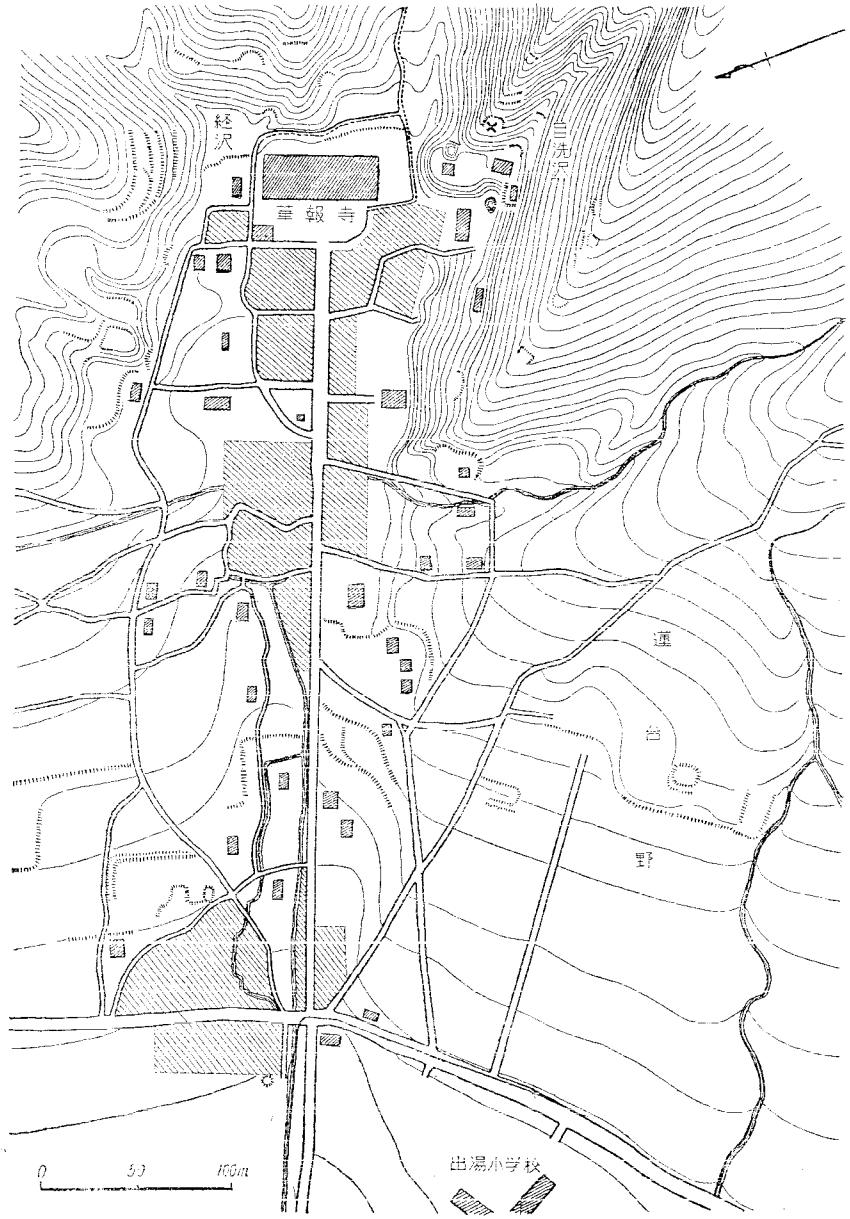
右志為過去慈　蓮聖霊一周忌也

本願聖人一実　大檀那平氏女

大檀那大中臣朝臣徳夜刃丸

永仁五年 大才丁酉　六　二十三 白 敬　（筆者傍点）

と刻まれていたことを記している。平氏女とは、大見氏一族の女子であつたのではあるまいか。普門の師聖一国師は、鎌倉の寿福寺、建長寺に来ていることから、普門も鎌倉在勤の大見行定などと接触をもつたと考えられ、華報寺もまたこのような縁故



第 2 図　華報寺付近地形図（×印伝高阿蘭址　伊藤正一氏原図）

から地頭大見氏の信仰を受け、被護されたものと考えられよう。

大見氏は水原、安田両氏に分れ、鎌倉時代には越後各地に地頭職を有していたが、南北朝より室町時代に入ると、越後の守護上杉氏の配下に立ち、戦国時代には長尾上杉氏に臣従するに至つた。華報寺も恐らく、この大見氏の勢力の消長と運命を共にした如くで、「建道集」に見える僧真観の名を最後に、文明九年、北越に禅宗を弘布した是船部耕雲寺六世太安梵守の書翰宗寺院としての再興まで、史上より姿を消しているのである。(4)爾来、現住岡田泰山師まで廿八世を経て現在に至つている。

× × × × ×

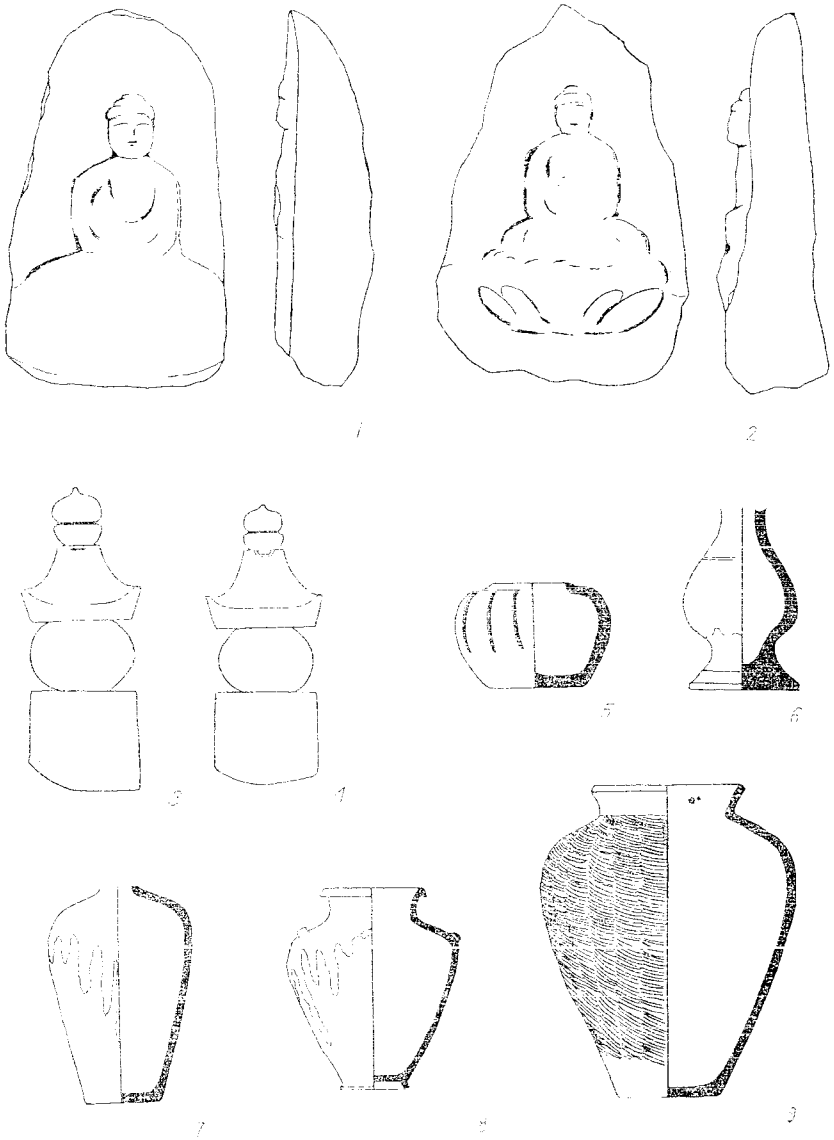
我々は現華報寺を中心に、略々七〇〇メートル四方に亘つて、千分之一の現状地形図を作成した。これによつてみると、旧寺域は東西に長い禅宗風な平面をもつていたと推測するに足る。その伽藍配置などについては一切不明である。中世禅宗寺院の伽藍配置については「建仁寺古図」、「伽藍指図」などによる復原的研究があるが、考古学的発掘例は稀めて少なく、僅かに、岩手大学板橋源教授等の手で行われた、岩手県遠野市東禅寺跡の調査例があるのみである。(5)従つて我々は、現在、大門という名を残す、現小学校附近の十字路の辺より東寄りの、山寄り一帯の略々二×四町の地域を、旧寺域であろうと推測するのみであつた。

現在の華報寺は本堂背後に、水原城主の墓と伝える中世末期の宝篋印塔を始めとし、数十基の墓石群をもつ。此の他に寺の背後の経沢、目洗沢と呼ばれる一帯の丘陵尾根に、階段状に削平された個処があり、この附近より中世関係の遺物がこれまで出土している。更に寺の四方の蓮台野と呼ばれる緩斜面が、近時多くの遺物を出している。大別して、中世華報寺の墓址群は二つより成つている。これまで美術的価値を有するものを多く出土しているのは、寺背後山腹の経沢、目洗沢と呼ばれる一帯である。第2図に見られる屋根部の削平部が墓址群にあたるものであろう。現在県文化財に指定されている二尊式爾氏所有の、宋竜、泉葉の青磁壺、古瀬戸壺、四耳壺、及び鉄製釜などは、経沢一帯の石壇式墓域より、逐次発見されたものといわれ、川上貞雄氏所有の天龍寺青磁皿の類も、寺背後の墓地改葬の際の出土であるという。(6)我々の調査中も、この階段状に削平された部分より、瀬戸系蔵骨器の破片が採集された。

一方蓮台野は緩斜面であり、これまでの出土遺物は、経沢、目洗沢のそれとは性格を異にし、遠有山世墓地に見られる五輪塔・陶製蔵骨器・石仏の類であり、その代表的なものを第3図に示した。

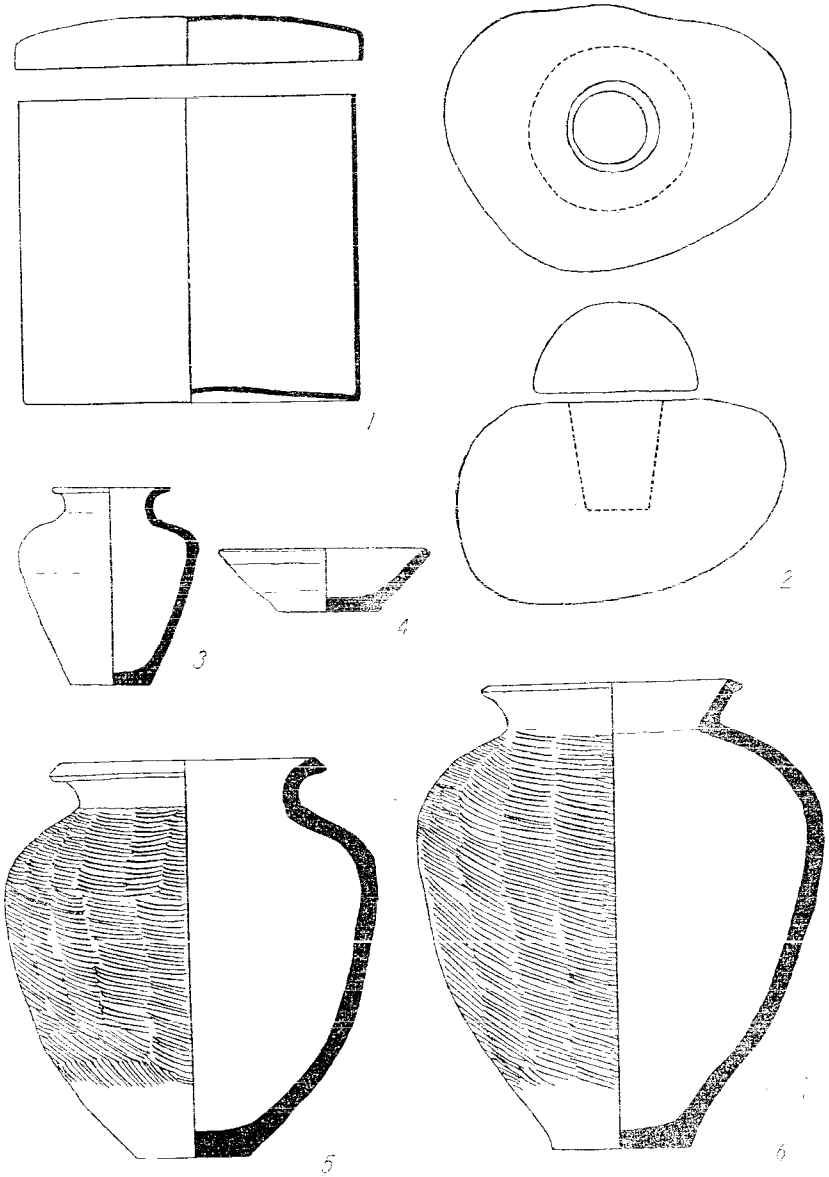
二、素詣和尚在銘蔵骨器出土地

ここは華報寺南方薬師堂の裏山で通称目洗沢と呼ばれ、また旧普賢堂跡と称されていた。山林の斜面を方五間程削り込んだところから、明治三十八年十一月七日、川上家先代萃治氏が、人夫に命じて採石中に石櫃を発見、中から後述する青銅製蔵骨器と周囲から三個の陶製壺を得られ、それらの中から銅製観音像・和鏡・人骨などを得られたという。川上氏母堂は、此等を



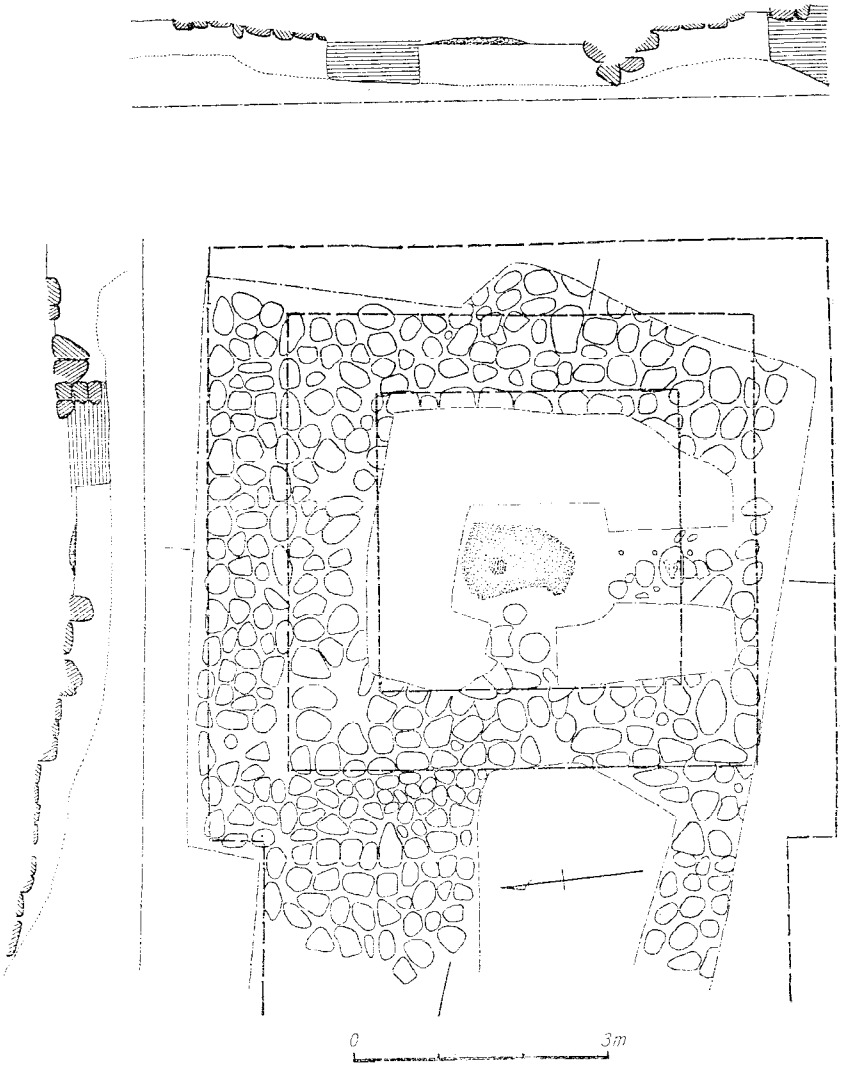
第3図 蓮台野，経沢出土品

1. 2. 石仏 蓮台野出土 全長（右）93cm （左）90cm 3. 4. 五輪塔 蓮台野出土 全長（右）80cm（左）72cm 5. 瓶子 経沢出土全長 1.2cm 6. 瓶 経沢出土 頸長 7.2cm 7. 瓶子 27cm 経沢 出土 8. 四耳壺 27cm 経沢出土 9. 壺 38cm 蓮台野出土

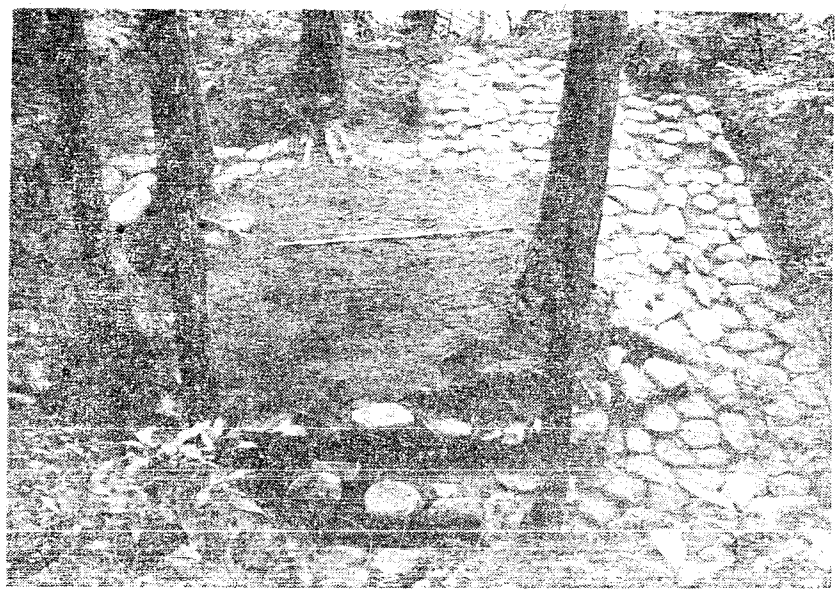


第 4 図　伝高阿廟址出土品

1. 青銅製蔵骨器　全長 10cm　2. 石櫃　長径 55cm　3. 陶壺　高さ 19cm
4. 陶鉢　高さ 6.5cm　5. 陶甕　高さ 38cm　6. 陶甕　高さ 46cm



第 5 図　伝高阿廟址実測図



第6図　伝高阿廟址

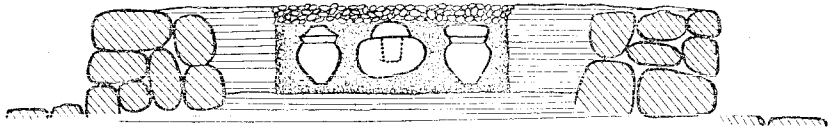
深く信仰し、一堂宇を建て仏像は秘仏として祀られた。(7)（第4図・巻頭図版）

我々は川上氏の奨めに従つて、清掃や土砂で埋まつていた遺構を清掃顕出し、出土品を当初のまま、復原することを試みた。

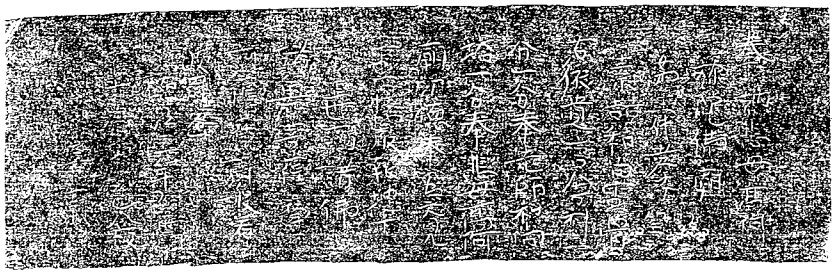
その結果、第5・6図に見られるような遺構を確認した。即ち、方四間西面の石敷で、正面に巾二間の張出部が付き、その内側方三間は二重に石を敷き、更にその中央は高さ約二尺に周囲に石を築き、内部に土盛りした方二間の土壇状をなしている。その南側から倒れた石仏一個が出土し、西側正面には横に長い石が数個、階段をなす如くに置かれていた。中央土壇上には樹齢八〇年程の杉が繁つており、東側背面は土の崩壊によつて、充分に遺構を顕出することが出来なかつた。

蔵骨器発見当時に立会つた川上音吉氏や、川上家の方々の聞書に基いて復原したのが第7図である。花崗石をくり抜いて作つた石櫃の下には木炭を敷き、数珠状の木の実がおかれていた。

此処の石櫃内より出土した青銅製蔵骨器



第7図　伝高阿廟址埋葬復元図



第8図　青銅製蔵骨器銘文

は、図版と第4図に示したように、高さ三寸一分五厘、径三寸四分五厘、蓋高三分、胴身に左の銘を有する。

奉納悲母高阿弥陀仏廟第三代孝子勧素話和尚霊骨、右依遺言舎利一分一分奉先師和尚塔一分悲母高阿廟功徳奉為覚蓮井敷報地一方三世一切諸仏諸尊菩薩摩訶般若波羅蜜

徳治三年戊申正月十八日

耶刻入敷　五十一才

右の銘文により、鎌倉時代における華報寺に素話の存在が知られると共に、この造構は素話和尚の母、高阿弥陀仏の廟であると一応推定されるのである。

阿弥陀仏なる号は、当時、浄土教信仰に伴う即身成仏の思想より附せられたもので、例えば、他阿真教等の「時衆過去帳僧衆」（藤沢　清浄光寺蔵）にも、その用例が多数みえている。(8)

廟は「字鏡集」によれば、イシノダフ、ヤシロなどと訓ぜられている。「本朝続文粋」に載せられている、「為左大臣修造浄妙寺願文」には、

山脚道一堂、修三昧、礎二恩父母之廟堂

とあり、「吾妻鏡」巻十、文治六年の条に、

拝敬左典厩廟堂、此墳墓被刷雨

と見え、「法華堂なる語も現われる。室町前期に成つた「鶴岡八幡宮寺社務職次第」の応永三十三年七月の条に、

予曰中山御廟者代々墳墓也、欲構覆屋

などと見えている。(9)

即ち、中世では廟なる語は墓そのもの、或はその前に設けられた、礼拝堂、覆屋などの意味をもつていたと考えられる。

然りとすれば、この高阿廟の方二間の墓壇の上に、どのような堂宇が設けられていたであろうか。「山門堂舎記」に、殿堂の墓堂のことを記し、

浄土院、菅桧皮方丈廟堂一宇（西面南）　菅板三間浄土堂一宇

菅板五間礼拝堂一宇、菅板五間二面雑舎一宇、伝教大師所定置矣、弘仁十三年六月四日辰兎、太師於山道院遷化之後、以其遺骸葬彼堂……

とあり、方丈、四面孫庇の語でも判るように方形平面の宝形造の堂宇であつたことを記したのを始め、平安　鎌倉時代にかけての墓廟的性格をもつ堂宇は多く宝形造であつたらしい。その

理由として、井上光夫助教授は、行道を行う為の機能的理由と共に、「不動、永遠、超越性を表現する為の形態上の理由を挙げておられる。[10]

この高阿廟址では、正面の石段状のもの、及び南側に於ける石仏の出土など、更に後述する禅僧の塔所例などから見て、方二間よりも狭い、或は方丈位の平面をもつ堂宇が、この上に建てられていたと考えられる。然し本来の高阿廟であるか否かは素詰の蔵骨器が中心にあり、最も丁重に葬られている点などから疑わしく、恐らく素詰の死後、高阿の廟を改修し、改めて素詰の塔所とし、高阿と合葬したものではなかろうか。

周知の如く、初期臨済禅に於ては顕・密・禅の区別が明白でなく、泉涌寺の開山塔が禅僧の墓である無縫塔の形式をとったり、関東第一の道場たる世良田の長楽寺が世良田流の灌頂を伝えたりしている。禅僧素詰和尚が、当代の庶民にまで信仰された浄土教に、深く帰依した母、高阿弥陀仏と共に葬られたのも、また鎌倉時代の信仰相を表わすものとして興味ある事実である。

次に銘文について更に見ると、坊徳奉為……以下は禅宗特有の銘文であるが、茲に問題となるのは、素詰和尚、及び第二代孝子助聖の句である。越後の郷土史家斎藤秀平氏は、高阿弥陀仏―素詰―助聖という血脈、及び普門―素詰―助聖の法脈上の第三代の助聖と解されている。[11]

東大史料編纂所玉村竹二助教授の御教示によれば、禅僧は兵来妻子を持たぬし、また、素詰なる名は禅宗史上に初見の名であり、諱のみしか見えぬ所から、恐らく地方在住の僧であったであろう。従つて法脈血脈は断定し得ない。むしろ、高阿弥陀仏から数えての三代目、即ち、血脈上、素詰の甥と見るのが妥当であろうとのことであった。

然らば素詰とは如何なる禅僧であったであろうか。前述のように禅宗史上には現われぬ名で、然も法脈も不明である。従つてここでは、いささか牽強附会の嫌いはあるが、一つの思いつきを記してみたい。

先に記した華報寺を禅宗に改めた無縫普門の伝記は、ことごとく後世に成るものである。その内に彼の伯父の名として見える蔵門は、「越後文書」所収の関東下知状に、

可早以平氏孝屋領知越後国白河庄内米
　正丸名田 弘安元年期之後 并同紀示迫名田事
右任亡父大見肥後民部大夫行定法師 法名 俗名
弘安六年四月五日譲状、可令領掌之状
依仰下知如件
　弘安十年十月八日
　　前武蔵守平朝臣（花押）
　　相模守平朝臣（花押）
　　（筆者傍点）

の内に見える、大見行定の法名と同一であるし、また普門に譲渡したという本智法師も、前に掲げた「東福寺文書」に現われる本智房と名前の上で合致する。従つて普門の伝記に、白河庄や九条家関係の史実、伝承がとり入れられているように感ぜられる。

更に、前引の「越後野志」に見える、永仁五年石銘経筒銘文にある大檀那平氏女の句、及び弘安年間の譲状に見えるように、華報寺周辺が大見行定の女子の所領であった事実などから、華報寺内に廟を設けられた高阿弥陀仏もまた、大見一族の女子とみなすことも可能ではあるまい。敢えて憶測するならば、前引の関東下知状に見える、母一期之後の母、即ち、摩尼等の母が高阿弥陀仏に当るのではあるまいか。

然りとすれば、素詰もまた、大見氏一族で禅門に入った者となり、普門の伝記に、大見一族の伝承、史実が混入しているとの推測が可能となる。

以上の推測は史料が不充分であり、全く臆測の域を出ない。従つて今後更に研究を進め、充分な史料的裏付をしたいと考えている。

次に、素詰の葬制に関聯して、当代禅僧の墓制について考えてみたい。

四、中世禅僧の墓制

中世墓制の考古学的調査は、部代のそれに比して著しく遅れている。これは墳墓標識のみの研究が美術史家、建築史家の手で行われ、それに比べて内部構造の調査がそれに伴って行われないからである。更にそれらの墳墓で、被葬者の判つているものの数は極めて少なく、またそれらが、現在も多くは御陵墓や信仰の対象となつていて、調査の手の及ばない事なども一因である。[12]

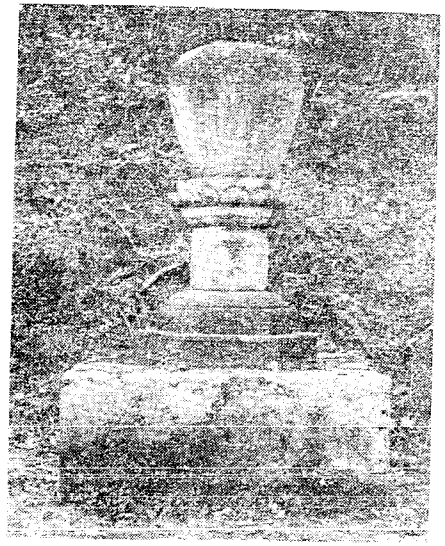
と考えられる。

寛保元年、釈道忠の編纂した「禅林象器箋」第二類墓堂門によれば、禅僧の墓塔としては、先づ卵塔＝無縫塔がある。我々は内部構造が文献によつて判る例として、建長寺開山、蘭渓道隆（大覚禅師）のそれを挙げることが出来る。

鎌倉市史第三巻所収の「建長寺文書」に、開山大覚禅師石卵中銅製蔵骨器銘之写というのがある。これは元保二年、第一八八世住持龍室徳湛が、道隆の墓石を移した際に、石塔内より銀製蔵骨器を発見し、新たに銅製の蔵骨器を作つて、これを収め、再び石塔内に納めたことについて記した文書である。

開山和尚舎塔辞世云
　　右蓋上彫刻之
大木西到清門南氏師諱道隆自号蘭渓世寿六十六其臘五十内
午来本朝化導三十三年
弘安改元戊寅七月廿四日木刻坐化
　　弘安二年己卯七月廿四日安置
　　白八角方彫刻之
　　骨器、八角四方高八寸横七寸三分以白銀製之
　　石卵、高三尺六寸横二尺九寸五分

とあり、道隆が寛元四年に来朝し、弘安元年に示寂、翌年この塔が建てられたことが判る。更に、この墓所が西来庵と呼ばれたことが、「建長寺文書」に記されている。[13]



第 9 図　蘭溪道隆無縫塔
（鎌倉国宝館写真）

このように、禅僧の墓塔として輸入された形式である無縫塔の内部には、蔵骨器が納められ、その墓所が建てられ、宗教儀式がおかれたことが判る。

この墓所の内部には、同寺にある蘭溪道隆像、或は絵像の類が置かれたものであろう。

次にもう一つの普同塔＝普通塔＝海会については、同じく「禅林象器箋」の同じ項に

忠曰、凡蔵亡僧骨植、同帰一塔、故大普同塔、文字禅普同塔記云、自仏法入中国、奉持之者、纔絶其法度、参差不齊、独百丈大智禅師、以禅律之学、約之人情、折中而為法、以寿後世、故其生、依法而住、謂之叢林、及其化世、依法而火之、聚骨石為塔、号普同塔。……

僧宝伝宝峰英禅師伝云、師維那、鳴鐘聚衆、叙行脚始末曰、吾滅後火化、以骨石蔵普通塔、明生死不離清衆也、言畢而逝

僧宝伝黄龍仏寿清禅師伝云、会遷言、蔵骨石於海会、示生死不与衆隔也

などと見えている。この葬制は死後も衆僧と離れず一所に葬る形式、即ち一種の合葬・追葬の形式を採んでいるのである。

従って、弟子も師と傍に葬られることを願い、名誉としたことであろう。

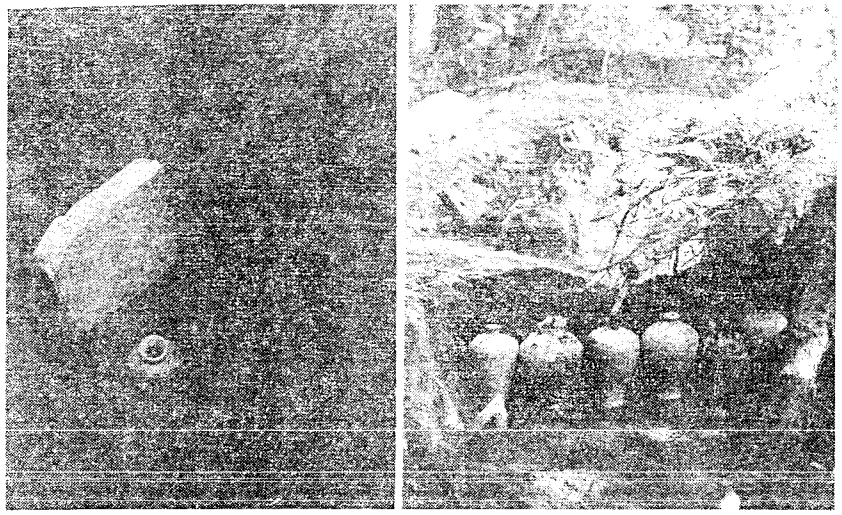
例えば、「元亨釈書」巻八の釈道海伝に、

延慶二年正月八月滅、荼毗得舎利百余粒、大如菽者数顆、小者如粟、諸徒塔西来菴側　（筆者傍点）

と見えているのも、その一例であろう。

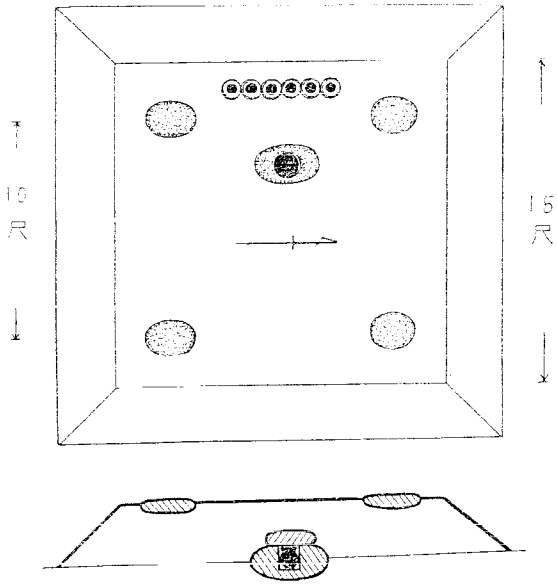
さて、この普同塔と現に呼ばれるものは、長崎の崇福寺などにもあり、多くは近世のものである。[14] 中世の普同塔は、どの様な内部構造をもっていたであろうか。この考古学的調査研究は、前述のように、宗教上の制約などから皆無に近い。

僅かに、昭和十二年、群馬県新田郡世良田村の旧長楽寺境内より、雷雨によって倒れた大杉の根元から、月船和尚の墓碑が発見され、群馬大学尾崎喜左雄教授等によって、ここが月船琛海（法照禅師）の塔所普光庵址であることが実証された例があるのみである。[15]



第 10 図　普光庵址遺物出土状況（尾崎氏写真）
右　西側納骨瀬戸瓶子の出土
左　月船和尚骨壺の出土

長楽寺は新田義季の開基、開山は栄西で、関東に於ける臨済禅と密学＝葉上流の灌頂を伝える大道場であった。月船和尚はこの寺の第五世住持であり、後に東福寺第八世住持になった鎌倉時代の高僧である。彼は延慶元年七十八才で、師田氏辨円の像の右に座して遷化した。東福寺にはその塔正統庵が建てられ、後に高弟快翁了一によって、長楽寺内に塔が建てられ普光庵と称した。[16]



第 11 図　普光庵址埋葬復元図

尾崎教授の調査記録によれば、東面した方十五尺、高さ三尺程の土壇のやゝ西寄中央より、瀬戸の壺を収めた石櫃が発見され、その蓋石に月船和尚と刻まれてあり、その西側より瀬戸の瓶子六個に収めた骨が発見された。土壇上には方十尺の建物があったと推定される礎石があったという。これに基いて内部を復原したのが第11図である。恐らくこの建物は宝形造の建物であり、内部には現在開山堂に安置されている、鎌倉末期頃の作の月船和尚像が安置されていたものであろう。

尾崎教授は、この塔側に葬られた六人の遺骨は、故翁了一及下六人の高弟のそれであることを考証されており、更に新田氏との関係にも言及されているが、詳細は近く刊行される同教授の論考に譲ることとする。

五、結　語

与えられた紙数も尽きたので、前章までに述べた華報寺跡群、素詣和尚、及び蔵骨器出土遺構などについて私見をまとめてみることとする。

一、華報寺は荘園領主九条家、及び地頭大見一族の被護の下に禅宗に改められ繁栄したが、その盛衰と命運を共にした。

二、無関普門の伝記の内には、右の関係を示す事実、伝承が、後に誤つて加えられと見られる節がある。

三、素詣和尚も大見一族と考えられる。彼の蔵骨器出土地点、その銘文によれば、彼の遺言に従つて甥の僧助盤が亡骸の高阿弥陀仏の墓廟に納めた所、即ち、高阿廟址とする考えが従来なされていた。然し、発見の当事者からの聴取や、遺構の清掃からえた結果から、彼の死後、改めて亡骸の骨と共に建てられた塔所であり、一種の普同塔ではあるまいかと考えられる。

四、素詣の先師が誰であるかは文献上不明であるが、彼は無関普門の死後十七年を経て五十一才で示寂している。両者の間に師弟の関係ありとせば、普門が宋よりの帰国後、再び越後に還住した頃、即ち晩年に近い頃の弟子ということになる。普門によつて禅刹に改まつた華報寺に於ては、当然彼の開山塔が建てられたとみてよい。これは前章でのべたように、月船和尚にも塔所が二カ所あり、また「元亨釈書」の巻六の釈覚心伝に「一分塔于都紀……」云々と見え、同書巻八の釈湛照伝に、「第七之朝其弟宣乞分骨塔……」云々とあることなどからも推察出来る。素詣の先師が普門であるとすれば、素詣の遺言より見て、その塔は普同塔の形式をもつていたと見なすことが出来る。而してその塔の位置は、嘗て歯骨入の白磁壺や龍泉窯の壺などを出土した、寺の背後、経沢の石壇状の墓地といわれるあたりと推定される。然りとすれば、寺の背後の尾根を削つた墓址と呼ばれる個所は、当時の禅宗の墓制よりみて、塔所の跡であり、建築遺構の一種とみることが出来る。従つて、経沢・日蔭沢の墓址群の出土品の性格が、単なる中世的な墓址群である連合野出土品と異なる理由もここに存すると考えられる。

× × × ×

以上貧しく雑駁な記述ではあるが、華報寺墓址群調査の概略を

紹介し、併せて二三の生起した問題についての私見をのべてみた。本稿は身辺多事の為に、充分な史料蒐集、吟味、批判をなしえず、昭和三十三年秋の第二十二回日本考古学協会での「越後に於ける中世墓址の調査」、同三十四年五月の第十三回人類学会連合大会での「中世の墓制について」、及び同年秋の第十四回日本人類学会、日本民族学協会連合大会での「中世禅僧の墓制について」などの研究発表の草稿に、若干手を加えて書き綴つた、いわば全くの概報と予察とにすぎない。明年度刊行予定の本報告書では、更に充分な推敲を重ね、誤謬と論理の飛躍の大い記述と考察をなしたいと願つている。大方の御示教を切に乞う次第である。最後に本稿図版は特に記したものの他はすべて岡本の手になるものであることを付言する。

（一九五九・一一・一〇）

註

（1）高橋義彦編　越佐史料　巻一
（2）続群書類従　巻二二七　伝部　九
（3）新潟県教委、越後文書宝翰集、所載の佐藤進一氏の解説による。
（4）鈴木泰山　禅宗の地方発展
（5）太田博太郎　中世の建築
　　板橋　源　禅刹遺跡達野東禅寺創建年代考（史学研究三〇）
（6）新潟県教委　新潟県文化財図録　第二輯所収　宮栄二氏の解説による。
（7）川上孝治　出湯洞春山聖観世音菩薩縁起
（8）田村円澄　浄土宗（日本文化史大系・鎌倉時代　所収）
（9）　古事類苑　礼式部　三八
（10）井上光夫　墓廟と宝形造り（日本建築学会論文報告集61所収）
（11）斎藤秀平　郷土史アルバム
（12）川勝政太郎　日本石材工芸史
（13）鎌倉市史　史料篇　第三
（14）柴福寺　柴福探古
（15）尾崎喜佐雄　かみつけより群馬へ
　　同　稿　法照禅師柴所普光庵址
　　右は未刊であるが、尾崎教授の御好意により特に借覧したものである。従つて引用は極く小部分にとどめた。
（16）東福寺　東福寺誌
　　禅刹住持箱上野洲関良田山長楽寺歴代

付　記

本稿脱了後、早稲田大学教授薗田香融博士より「仏跡禅師骨壺と貞時追悼経筒」と題する中世遺亡金石文についての論考別々の恵与を受け、また長崎市の宮田安氏より柴福寺普同塔について種々御教示預いた。両先生の学恩に篤く御礼申しあげる。